

# 酔人出家・破戒譚の系譜(二)

——酒が一番悪い——

## 三浦俊介

### 五、酔悪人出家譚

狂言に『悪坊』という演目がある。<sup>(1)</sup>以下に内容を略述する。

西近江の出家者が東近江へと急いでいたところ、長刀・刀を持った男と同道し、脅迫されて食事を共にするはめになる。

出家者は、飯屋の亭主から「男は六角殿の同朋の悪坊という者だ」と教えてもらう。出家者は、悪坊が寝入っている間に、小袖を「ころも」に着せ替え、長刀の代わりに「からかさ(傘)」、刀の代わりに「助老(座禪の小休止の時に頸を乗せる棒)」を持たせる。起きた悪坊は自分の姿に肝を消しつつも、「日頃、酔狂いたす故にかやうの事に逢うた。是非に及ばぬ。道心を起こそう」「思ひ寄らずの通世や」などと言い、助老・傘を持ち、法衣のまま托鉢に出る。

この出家座頭狂言の展開は、前稿「酔人出家・破戒譚の系譜(一)」(『論究日本文学』70号、平成十一年五月)で論じた酔婆

羅門・酔乞者出家譚の延長線上にあると考えられる。すなわち、「酒に酔った男が僧形になったことを契機に、真の仏道修行者となる」という内容だからである。「酔狂」の語が悪坊の台詞の中に見え、悪坊が「酒に酔うこと」は展開上欠くべからざるものであることがわかる。ただし、酔婆羅門出家譚が仏の敵対者である婆羅門自らが釈迦のもとを訪れるものであったのに対し、『悪坊』ではただの酔狂な乱暴者がたまたま路次で僧と遭遇するという無縁性に新味がある。また、「寝ている隙に僧形にされる」点では酔乞者出家譚との関連も指摘できる。

ところで、出家座頭狂言には、『悪坊』とその基本構造を一にする『悪太郎』という演目も存在する。展開を寛永十九年成立の大蔵虎明本で確認したい。<sup>(2)</sup>本文引用に際しては読解の便宜を図って、漢字かな表記を改め、句読点を整えた。また、会話を示す「」を補い、私に改行した。ただし、音便の表記は原態のままとした。以下の引用もこれに準ずる。

はじめ長刀持つて、悪坊の如く、刀を差いて、小袖を打ち掛

けて、酔うて出て、おちの所へいて、おちを呼び出す。おち出て、

「何事ぞ。又、おぬしは酔うて来たか。まづ寝よ」と云ふ。

悪太郎、

「いや、酔はぬ程に、酒をたもれ。飲みたひ」と云て、無理に酒を乞ひ出して飲ふで、暇乞ひをして出て、道に酔ふて寝ている時、おちが出て、

「酔ふた上に、また是にて酒を飲ふだ程に、道に寝ておらふ程に、見てまいらふ」と云て、寝ているを見付て、

「さればこそ言語道断の事じや。あの如くにいつもしておらば、道具も、着る物も取られて、外間を失はふ。是非に及ばぬ次第じや。いたしやうがある」と云て、道具も着る物も取つて、

「かしらを剃らふ」と云て、白頭巾をかづかせて、ころも、数珠と、編み笠をそばに置き、編み笠をかしらに掛けて、ころもをば上に着せて、おち、

「汝が名をば、南無阿弥陀仏と付るぞ、ゑい。是で懲りやうと存ずる」と云て入。

悪太郎、悪坊の如く、肝つぶし、「囉齋に出る」と云ふて立つ。

その時、坊主、念仏申、鉦鼓たゝひて出るを、悪太郎、

「あら奇特や。某が名を、はや知りて呼ぶよ」と云、

念仏申を、「やあ〜」と云。

「やら、逸興なものがある。あのやうなものに構ふが悪ひ」。念仏申せば、その如く返事をする。早むれば、早う返事する。

(中略)

「いや、身どもは念仏申」。

「それが身どもが名じやによつて返事をする」。

「おぬしは珍しい名を付いた」。(中略)

「付けられた名の訳も知らず、うか／＼とありくところに、方々に逢ひて、殊勝なる事を承る。かやうの事も多生の縁なる間、今よりしては方々の弟子にならふ」。

「尤もの御心ざしじや。弟子に致そう」(下略)

このように狂言『悪太郎』では、深酒をした甥の「悪太郎」が長刀などもそのままに川辺に寝込んでいるのを「おち」が見て、戒めの気持ちから悪太郎を「坊主」姿にし、「南無阿弥陀仏」という阿弥号を悪太郎に吹き込む、その後、悪太郎は念仏僧と出会い、珍妙な会話の末に弟子となるというドラマが描かれている。引用した虎明本では二箇所「悪坊の如く」と見え、本作が『悪坊』の影響下に成立したことが示されている。

狂言『悪坊』および『悪太郎』が、先行する「酔婆羅門出家譚」を継承していることは、田口和夫氏が論文『「悪太郎」の形成と展開』(三弥井選書『狂言論考』所収)の中で夙に指摘している。拙稿は基本的に田口氏論文の上に成り立っている。酔婆羅門出家譚としての狂言『悪太郎』の主題や形成について、田口氏の論点を簡単に整理しておく、以下の通りである。

①『悪太郎』の主題は、「悪なる人間が外的な変化を転機として、善なる道に入る」とみてよい。(同書138頁)

②『悪太郎』には、中心趣向が二つある。人物の関係では、a「悪太郎とおぢ」と、b「悪太郎と念仏僧」であり、筋では、a「酒に酔っては悪逆をする悪太郎が、寝ている間に出家の形にされて、道心をおこすこと」と、b「念仏僧との出会いによって、その道心がただしく弥陀信仰に導かれること」である。bは、aの結果を補強する役割を担っている。(同書138頁)

③『悪太郎』の現存最古の伝本として虎明本(大蔵流)と天理本(和泉流)がある。概括してみれば天理本の方が先行形態であるが、両本の、出家するまでの前半部分は、力点の置き方が違うものの、もともとは同一である。(同書149頁)

④虎明本と天理本との共通祖形は『悪坊』と同一になる。(同書150頁)

⑤『悪太郎』の中心趣向aと『悪坊』全体の中心趣向はまったく同一であり、主題もまたまったく同一である。この二曲が共通の典拠を持っていることは間違いない。(同書139頁)

⑥説話「酔婆羅門出家」が、狂言『悪太郎』前半部の原拠である。(同書148頁)

⑦説話「酔婆羅門出家」は、『大智度論』『法苑珠林』『今昔物語集』『金沢文庫本仏教説話集』『三國伝記』『沙石集』『説法因縁集』『法華経直談鈔』などに含まれている。(同書140頁)

⑧「笑」や「教化」の効果を舞台上において見せるために、説話と

は違う『悪太郎』独自のものとして念仏僧が登場した。(同書148頁)

その他、伝本や演出などについても詳述されているが本稿では引用を控える。田口氏の言うように、確かに狂言『悪太郎』『悪坊』は酔婆羅門出家譚を原拠としている。しかし、本稿では、田口氏の論究しなかった問題点について指摘しておきたい。

それは「悪太郎が酒に酔った後、路傍に臥す」という展開の持つ意味である。この展開は、田口氏という「筋の上でのa」の一部である。しかし、原拠である『大智度論』や『法苑珠林』、日本における享受を示す『今昔物語集』『三國伝記』などに「路傍に臥す」という記述はない。その展開を有するのは『鼻奈耶』や『日本霊異記』である(前稿二章)が、狂言作者が律書や『日本霊異記』を参看したとは考えにくい。両書における「熟睡」のモチーフは、そのストーリー全体の中のほんの一部分でしかないからである。他に典故が存する可能性も否定はできないが、おそらくは悪酔いした者によく見受けられる様態として形象化したものであろう。常識的に考えれば、酔婆羅門のように、酒に酔った折にたまたま出家の心を起こす人間など存在しない。しかし、全く出家の意志を持たない登場人物を、酒に酔った後に僧形にするドラマを描くからには、衣類を脱がせ、剃髪させる間も乱暴者がじつとしている状態、すなわち泥酔し熟睡している状態を設定する必要があった。狂言作者は、ドラマのリアリテイを求めて「路傍で寝入る乱暴者」という極端な人物像を作り出さざるを得なかったのである。結果的に、この「悪酔い」から「路傍での熟睡」へ

という展開は、暴力的な酔っ払いの多難な行く末、ある意味では「因果応報」「悪因悪果」を予感させる絶好の演出となつて、観客の失笑を誘ふこととなつた。

「長刀・刀」にも問題がある。どの流派の狂言においても、悪太郎は長刀や刀を持って登場し、寝ている隙におじに持ち去られてしまう。例えば大蔵流の山本東氏書写本には、その展開が「長刀・小サ刀を取り、厚板を脱がせて取り、代りに編綴・数珠・塗笠を置き」と小書きしてある。<sup>(4)</sup>

しかし、ここで重要なのは、悪太郎が長刀を当初から持っていたかどうかである。田口氏はこの点に関して、「虎明本においては、酔狂という状態をはじめからみせているので、長刀をもつてでる必然性がある」が、天理本においては「しらふで「しまひ二行」くわけだから、長刀をもつてでる必然性がうすい」と言及し（前掲書140頁）、さらに「天理本が、本来あるべき「狂」の状態をはなれて「和」の状態から出発させたことも、徹底した悪人としてえがきえなくなつたということのあらわれと理解される」（同書164頁）と論述している。本章では特に、天理本に「長刀を持って出る必然性の薄い悪太郎」という人物設定が見えることを強調しておきたい。本章では狂言に登場する酔狂の男たち、悪坊や悪太郎を紹介した。これらの人物のように、「長刀や刀などの武器を持つ乱暴者が、酔つて路傍で寝ている間に情形にされたのを契機に出家する」という型の説話を、本稿では「酔悪人出家譚」と仮称することとする。「酔婆羅門出家譚」とは別に殊更にこの型を設定したのは、

この酔悪人出家譚の「刀剣類を携帯していること」と「酔つて路傍に臥すこと」の二つの要素が、次章で取り上げる作品において大きな意味を持つてくるからである。

本稿では、本章までで「酔婆羅門」「酔乞者」「酔優婆塞」「酔悪人」などの説話を取り扱ってきた。以下、この四者を総称する場合に「酔人」と称することとする。

## 六、秋成「捨石丸」

本章では、上田秋成の『春雨物語』第七回「捨石丸」（以下『捨石丸』と表記する）を取り上げる。引用は『上田秋成全集』所収の文化五年本（桜山文庫本）に拠つた。<sup>(5)</sup> 私に一箇所だけ傍線を引いた。

（前略）捨石丸と云は、脊六尺に余りて、肥ふとり、世にすぐれ、酒よくのみでらふ。長者の心にかなひ、酒飲む時は必呼よせたり。或時、長者酔のすゝみに、「おのれは酒よく飲めど、酔ては野山を忘れ臥故に、石捨たりと云あだ名は呼ばるゝ也。よく<sup>(寝)</sup>入たらんには、<sup>(熊)</sup>態、狼に食らはるべし。此剣は、五代の祖の力量にほこりて、刃広にう（た）せ給へる也。野山の狩を好みて、あら熊に出あひ、いかりにらまへ、齒むきて向來たるを、此剣ぬきて、腹をさし、首うちて帰られしより、熊切丸と名呼ばせし也、おのれ必酔ふして食らはれん。此剣常に帯よ。守り神ならん」とて、たまへる。推いたゞき、

「熊、狼は手取りにせん、鬼や出て食らひつらん、鬼去丸と申さん」とて、左に置き、よろこびの酒とてすゝむほどに、酌にたつわらはめ、「今は三升にも過たらん」とて、いらふく。

此心よきに、野風を浴びんとて、立つ足しどろに立ち行。長者見て、得させし剣失ふべし。帰るを見とゞめんとて立も、足よろほひたり。小伝次、父あやうしとて、跡に付て行。はた、流ある所に打たをれ、足はひたして、剣は枕のかたに捨たり。かくそあらんとて、長者取りたるに、目覚め、給ひしを又奪ひ給ふやとて、主忘れ争ふ。父力に堪へねば、劍持ちながら、仰向きになりて、捨石其上にまたがる。小伝次はるかに見て、丸を引たをし、父を助けんとすれど、力弱くて、心ゆかず。丸、又小伝次を右手に捕らへて、「和子よ何をかす」と、前に引まはし、父の上に据えたり。されど、主といふ心や付きけん、いたはるほどに、父を助けて、丸を強く突き倒す。父、起き上がりて剣をとり、「己は誠に日本一の力量ぞ。武蔵坊と申せしは、西塔一の法師也」と、うた謡ひて行。捨石、あとにつき、「衣河へと急る」と拍子とりて来る。父が剣に手かけて、奪はんやとするに、抜出て、己が腕に突き立てしかど、長者の面にそゝきて、血にまみれたり。小伝次、父をあやめしやとて、後より強く捕らへたり。捕らへたるを、又引まはして、面を打つ。是もいさゝか血そゝきかけたり。父は子を過ちしかとて、剣の鞘もて、丸がつらな

打つ。抜たるに受けて、何やらん謡ひつゝ、又父を捕らふ。さすがに刀は当てざれど、己が血の流て、長者の衣に染みたり。家の子ども一・二人追来て、「こわや御二人を殺すよ」とて、前後ろに取り付く。さてはあやまりつと思て、二人の男を左右の腋にかいささみ、「主殺しはせぬぞ」とて逃行。二人の男ら、捕らはれながら、「主殺しよ」とて、をらび云。さては父子ともに我過ちしよとて、二人の男を深き流に打ちみて逃ゆく。(下略)

いささか長文の引用となつたので、下略部分も含め全体を要約すると以下の通りである。常に酒に酔つては野山に臥す「捨石丸」が、小田長者と三升もの酒を飲み、賜つたばかりの剣を枕元に置いたまま、川辺で寝てしまふ。剣を取り返そうとする長者や、その子「小伝次」と揉み合いになり、三人とも血まみれになる。捨石丸は、長者の家の子ども二人を川に投げ込む。二人は水死し、翌朝、長者も頓死する。逃走後、捨石丸は相撲取りとなり、やがて前非を悔い改めて、豊前国の岩山に隠道を掘り始める。敵討ちに来た小伝次の協力も得て、捨石丸は隠道を貫通させるが病死する。その後、捨石丸は「捨石明神」として祀られ、祠が建てられて国中の民に崇められた。

『捨石丸』の展開はやや変則的ではあるが、これもまた酔婆羅門・酔乞者出家譚の系譜の上にあると考えられる。すなわち、「世にすぐれ酒よく飲み食らふ」捨石丸は、主人である長者とともに「三升にも過ぎ」るほどの酒を飲んで、「流ある所に打ち倒れ」

た後、賜った「剣」を失つて逃走するが、最終的にはオホナムチやスクナヒコナ、もしくは行基菩薩とも比すべき偉業を成し、「捨石明神」として国中の民の崇拜の対象となつたからである。

もちろん酔婆羅門・酔乞者出家譚との相違点もある。捨石丸は、刀剣を奪われそうになつた時に目覚めており、剃髪させられたわけではない。田口氏のいう「外的な変化」はなかつた。しかし、彼の持ち物である刀剣は取られ（取り返され）、事件後、自らの行動を悔い改めた彼は、苦行を強いて難工事を完遂している。捨石丸は、言わば「心の出家」を見事に果たしたのである。

次に、本話における「刀」の役割について考えてみたい。悪坊や悪太郎は最初から長刀・刀を持つ男として形象化されているが、捨石丸は長者に譲られる形で剣を入手する。この部分だけは、悪坊・悪太郎をも含む酔狂の男たちとの説話にも見えない展開である。ただ、前章で強調した通り、天理本『悪太郎』における悪太郎は「長刀を持って出る必然性の薄い」「徹底した悪人として描きえなくなつた」人物に変形しつゝあつた。「捨石丸」もまた、怪力を持つ巨漢ではあつても本来暴力的な男ではなく、愛すべき大酒飲みとして描き出されている。彼は、長刀を常時携帯し自在に操る本来の「悪太郎」像とは異なるキャラクターであり、本来「刀剣」を持つべきでない人物であつたと考えられる。

野山で熊や狼に出会つた時の護身用にと、主人から賜つた名剣を、捨石丸は恭しく頂戴して、「熊、狼は手捕りにせん、鬼や出でて食らひつらん、鬼去丸と申さん」と言つて、「左に置き」と

本文（傍線部）にある。この「左に置く」という何げない描写だけで江戸時代の読者には「捨石丸は刀剣を持つべき人物でない」ということが強く印象付けられたはずである。この表現について、美山靖氏は新潮日本古典集成『春雨物語 書初機嫌海』の当該箇所（の頭注の中で、「右に置くのが正しい作法。礼儀作法に無知な捨石丸の拳動を表現した」と的確に指摘している。分不相応な名剣が、無作法な捨石丸に与えられたことが描写され、以後に起こるであろう不幸な事件が暗示されている。この刀剣こそが結果的に連鎖的殺人という悲劇を生み出し、ドラマを大きく動かしただことを思えば、「捨石丸は刀剣を持つべき人物でない」ということをさりと表現した当該箇所は、『捨石丸』の全体構想を支える非常に見事な表現と言える。その意味でも美山氏の指摘は重要である。こうした人物造形は『捨石丸』独自のものであり、秋成の面目躍如たるところでもある。

捨石丸の「刀剣を持つべきでないのに、現実にはそれを持っている酔人」としての登場、「路傍での眠り」、その後の運命の大転換という展開は酔悪人出家譚、すなわち狂言『悪太郎』のそれと一致している。『雨月物語』『春雨物語』を中心に秋成の著作における謡曲（能本）の影響に関する先行研究は枚挙に暇がない。しかし、狂言の享受に関する指摘はごくわずかである。江戸期において狂言の詞章が謡曲ほど固定化していなかつたことや、そのこととも関つて古い狂言本があまり残されていないことが、厳密な比較研究を妨げている。秋成はおそらく能楽だけでなく狂言も

多く鑑賞したことであろう。あるいは、その目で『悪坊』や『悪太郎』を見たかもしれない。しかし、秋成が本当に狂言『悪太郎』を見、それを参照して『捨石丸』を書いたのかどうか、それも「長刀」の要素の薄いた理本系の演出によるものだったのかどうかを検証することは困難である。ただ、本稿で主張しておきたいのは、『捨石丸』は、単に「酔婆羅門出家譚」の流れを汲んでいるというよりは、「刀剣所持」と「路傍での熟睡、所持品の放置」という展開を有していることから、狂言『悪太郎』型のドラマを踏まえて構想された可能性が高いということである。

ところで、本稿では『捨石丸』の構想についてもう一点指摘したいことがある。『捨石丸』では衝動的連続的に傷害事件が発生する。水辺で寝ていた捨石丸の名剣を保管しようとして長者が手を出したところ、捨石丸が折あしく目覚める。捨石丸は主人と気が付かずに揉み合いとなり、両者ともに「血にまみれ」る。長者の息子は、捨石丸が父を傷つけたかと誤解して格闘となり「血そそぎかけ」、父はまた我が子が傷つけられたかと誤解して捨石丸を乱打する。家の子とも乱闘に参入する。酒の酔い、名剣の保全、父子の情愛、主従関係など様々な条件が重なった混乱の末に複数の死者が出るのである。この展開の中に「酔婆羅門出家譚」の影響を読み取ることはできないだろうか。

ポイントは、長者の家の子どもが「こわや、御二人を殺すよ」と話した時に、捨石丸が心の中では「さては誤りつ」と思いつながら「主殺しはせぬぞ」と言っていることである。これは捨石丸

本人にとつて明らかな「嘘」である。「主殺しはせぬぞ」と確信するのであれば、逃げる必要がない。この嘘には「酔い」と「寝起き」という二重の判断の鈍さが関与している。彼は、確信が持てないにも関わらず「主殺しはせぬぞ」と言う。「飲酒」して「殺生」に関する「妄語」を言う。この展開は『宝物集』ほか所収の「酔婆羅門出家譚」と共通している。もちろん、前稿三・四章で確認した通り、『薩婆多毘尼毘婆沙』や『宝物集』所収の酔婆羅門出家譚における「殺生」はあくまで「鶏」をめぐるものであり「人殺し」ではない。また、「流血」の要素や連続殺人という点からは『三国伝記』との関連も考えられないわけではないが、両書間の主題や全般的な展開は大いに異なっているから、強引な付会は避けたい。確言できるのは「妄語」の要素が酔婆羅門出家譚と一致するという点である。この共通点は重要である。

さて、秋成の形象化した捨石丸像を本稿の趣旨に沿ってまとめよう。

酔っぱらって、主人から拝領した剣を捨てるかのように放置して川辺に倒れていた捨石丸の姿は、仏具を投げ出して臥していた「嚜偈」や、長刀を投げ出して臥していた「悪太郎」などと酷似している。

また、酒の酔いによる半睡状態だったからとは言え、連鎖的に人を殺してしまい、「さてはあやまりつ」と思いつながら「主殺しはせぬぞ」と主張する展開は、飲酒戒を破ることによって殺生戒や妄語戒などの戒律をも忽ちにして破った酔婆羅門の説話と重なる

つてくる。

さらに言えば、酔いが醒めた時に、自分の主人を傷つけたことに驚いて逃げ去る捨石丸の姿は、酔いが醒めた時に自らが出家の体をしていることに驚いて走り去った婆羅門の姿と同じである。

つまり、『捨石丸』は、酔婆羅門出家譚、醉悪人出家譚、『宝物集』型の酔婆婆塞破戒譚など、酒に酔った男の説話群を構成し直して形象化されたような複雑な展開を有していると言える。もちろん実際問題としては、秋成自身がこれらの説話を煩瑣な作業を通じて操作し、『捨石丸』を構成したとは到底思えない。しかし、前半部の醉人譚は狂言『悪太郎』型の説話が利用されたものであり、後半部の難工事完遂譚は大分県耶馬溪における禅海の「青の洞門」開整譚を利用して描かれたものだろう。

『春雨物語』には伝本の問題がある。遂に板行されることになった『春雨物語』には、秋成自筆『春雨草紙』断簡と、文化五年本系の写本、天理冊子本『春雨物語』、天理卷子本などがある。『捨石丸』に限れば、『春雨草紙』文化五年本系桜山文庫本・天理冊子本があり、本文に少なからぬ異同が存する。それどころか秋成の最終稿本である富岡本に『捨石丸』は採られていない。おそらくは、構想を同じうする大作『笑噺』を『春雨物語』最終話に持つてくることで彼なりに納得したのであろう。

狂言『悪太郎』には「悪に強いは善にも強い」という慣用句が使われている。この句は、『摩訶止観』卷第八下第五「魔事の境を覩ず」を承けて成立した「魔仏一如観」なる思想とも関連してお

り、秋成の『雨月物語』「青頭巾」の「心放せば妖魔となり、収むる時は仏果を得る」や、『笑噺』の「心をさむれば誰も仏心也。放てば妖魔」とも響き合っている。特に『笑噺』の「心をさむれば誰も仏心也。放てば妖魔」とは、この笑噺のことなりけり」という結びの言葉は、そのまま『捨石丸』に入れ替えることのできるものである。秋成は、怪力の巨漢「捨石丸」を設定し、これを酒乱ゆえの殺生に追い込み、しかし逆縁をもつてこれを改悟せしめ、土地の「明神」にまで昇華させることで、『笑噺』に端的に示された「魔仏一如」のドラマを描こうとした。酒への弱さ、自分への甘さ、腕力の強さなどを乗り越えた「真に強い人間の物語」を求めたのである。

#### 七、狂言『六人僧』ほか

狂言『六人僧』にも『悪坊』『悪太郎』同様、「醉人出家譚」が利用されている。しかし、これは前述の一連の説話群とはかなり異なる様相を呈している。元禄一三年刊『続狂言記』卷三(九)に『六人僧』の本文がある。この『六人僧』について、新日本古典文学大系『狂言記』曲名索引の略解説には、「出家狂言。江戸後期以降の和泉・鷺流にあるのみで、狂言記が原形。男三人で寺参りの途中、眠った男の頭を二人が剃る。剃られた男は家に帰り、二人の妻たちに夫が死んだと告げてその頭を剃り、戻った男たちには妻が尼になったと告げてその頭を剃る。二組の夫婦は怒って



男の妻の頭を剃り、六人みなで後生を願う。」とある。言わば、寝入った男の剃髪を契機に連鎖的に六人が頭を丸める話である。該当部を「和泉・鷺流の原形」という『続狂言記』で確認する。五章同様の読解の便宜を図った。

シテ「罷出たる者は、此当りに住居致す者でござる、此中思ひ立て、仏詣致さふと存る、某斗でもなし、一兩人申合た方がござる程に、これを誘ふて、道同致さふと存ずる、参る程に是でござる、誰殿、御宿にござるか」(中略)

(シテ)「や、殊の外くたびれてござる、折節これに辻堂がござる、先腰を掛けて、休ませふ、あゝいこふ草くさくさ臥てござる、ちと某はまどろみませふ」(中略)

アド「ちと是へござれ、申、よふ寝入つたと見へた、就夫最前あの人は何事をしたりとも、腹を立まいと言はれた程に、ちとなぶつてみませふ」(中略)

初ア「あの人寝濃い程に、こかいても知られまい、いざ坊主になさふ」

後ア「夫はあまりじやが」

初ア「いや、何ごとも腹を立まいと言ふからは苦しい有まい(下略)」

この狂言『六人僧』で最初に僧形にされた男は剃髪されるのにも気付かぬほど寝入っているが、酒に酔っているわけではない。

「酔」の要素が欠落しているのである。ここでは、主人公たちの行為から「飲酒」を排除し、「旅」の疲れという新しい要素を導

入している。

狂言『六人僧』の展開は、井原西鶴『西鶴諸国ばなし』巻一の七「狐の四天王」、および同書巻三の三「お霜月の作り髭」にもかなり変質した形で見出すことができる。<sup>62)</sup>

前者は、「姫路に住む狐の姫を誤つて磔で殺してしまった本町筋の米屋「門兵衛」夫婦や、その息子・嫁までもが、人に化けて乱入して来た狐によって坊主頭にされてしまう」という話である。連鎖的に僧形になる点は狂言と共通しているが、酒乱はもちろん、熟睡の要素さえ見られない。あくまでも「狐の復讐譚」として構成されているのであって、本稿でいうところの「酔人出家譚」の定義・系譜からは外れている。

後者は、「大酒飲みの真宗信者と法師がお取越(親鸞上人の報恩講)の夜に飲んで、翌日髻入りする若者の顔に落書きをする。

髻入りの席で恥をかかされて死装束をした若者への詫びとして、落書きをした四人も作り髭をした」というものである。本話は、大酒を飲んだ同行が悪戯をした結果、自分も付け髭をすることにいったというものであり、「熟睡」の要素は共通しているものの、①酒を飲んだほうが悪戯をする、②剃髪(毛髪に関するマイナスの変身)でなく付け髭(毛髪に関するプラスの変身)である、③悪戯をしたほうも変身するという点で、「酔人出家譚」に対して正反対の展開を選んだとも言えるが、直接的には「酔人出家譚」自体とは無関係の笑話と捉えたほうが妥当であろう。ともに狂言『六人僧』の延長線上にはあるものの、酔人出家譚から遠ざかっ

たとえよう。

その他の類話に、十返舎一九『滑稽しつこなし』<sup>(15)</sup>や『耳囊』巻一「悪敷戯れ致間敷事 附悪事に頓智の事」<sup>(16)</sup>、上方落語『百人坊主』<sup>(17)</sup>、江戸落語『大山まいり』<sup>(18)</sup>などがあるが、本稿で本文を引用する余裕がない。いずれも一人の男への悪戯を契機に、多数の人間が剃髪・僧形となるという内容であり、「酔婆羅門出家譚」の系譜の末席に位置するものと考えて良い。

#### まとめ

本稿では、酔人につつまれる説話を大きく「出家譚」と「破戒譚」の二つの型に分けて、その変奏の有り方を検討してきた。

「酔人出家譚」の本流は、『大智度論』『法苑珠林』を原拠とし、『今昔物語集』『三国伝記』その他多数の説話集に収載されてきた「酔婆羅門出家譚」である(本稿第一章)。「金沢本仏教説話集」「言泉集」「法華経直談鈔」などに採録されていることから、当該説話が説法唱導の場で盛んに利用されたことは明白である。本話は、やがて狂言『悪太郎』や『六人僧』などの形で演劇化され、さらには落語となって一般に広く流布することとなった(七章)。

また、『日本書異記』所収の「酔乞者出家譚」は、『鼻奈耶』を参照して構成されたと思われる別系統の説話である(二章)が、釈尊自身による出家でなく、知人による悪戯を契機に法会での奇瑞に遭遇する内容や、酔人が路傍で熟睡するモチーフが斬新で、

応用力もあつた。「酔乞者出家譚」のモチーフは狂言『悪太郎』にも流用され(五章)、それは上田秋成の『捨石丸』にも援用された(六章)。

「酔婆羅門出家譚」には『宝物集』型と『三国伝記』型の二つがあつた。前者は『薩婆多毘尼毘婆沙』『法苑珠林』を原拠とする破五戒譚で、五戒のうちの「遮罪」である飲酒戒を破つたことによつて、他の四つの「実罪」邪淫・偷盜・殺生・妄語すべてを破つてしまったというものである(三章)。後者は出典未詳の説話であり、「破戒」というより「五逆」を説いていて、前者と系統を異にしている(四章)。両者を混同して論じてはいけない。

『捨石丸』は「大酒飲み捨石丸が、殺人を契機に難工事を達成し、明神と祀られる話」である。基本的には「酔婆羅門出家譚」の型を踏襲しているが、「刀の携帯」「路傍での熟睡」の展開を有することから、狂言『悪太郎』の享受下に成立した可能性が高い(六章)。「宝物集」型の「酔婆羅門出家譚」の影響も考えたが、十分に実証することはできなかった。

「酒が一番悪い」、拙論の副題でもあるこの命題は、本来「酔婆羅門出家譚」における「五戒の中で何が一番重要か」という問いに対する答えである。「殺生戒よりも飲酒戒のほうが、より重要だ」という意外な答えは、鶏を盗み殺し食べた酔婆羅門のみならず、酒ゆえに人生を方向転換せざるを得なくなった他のすべての酔人たちの胸にも深く染み入るものである。酔人出家譚・破戒譚は多くの書物に収載され、無数の説法の中で利用されてきた。そ

れはひとり、酒を飲むことに何の差し障りもない一般の参拝者、聴衆だけの問題ではなかった。酒は、習合した神社の御神酒用に僧坊酒として寺院内でも造られ、また「般若湯」の忌み名のもと、僧堂や草庵で隠然と飲まれてきた。当該説話は、この飲み物の真の恐ろしさ・危険性を「殺生」と結び付けることで強く警告するものであり、僧侶自身が自戒を込めて語り継いできたものであつたらう。

醉人出家譚は仏教者にとつて誠にめでたい説話であり、醉人破戒譚は酒飲みにとつて全くありがたくない、「明日は我が身」と身につまされる説話である。醉人出家・破戒譚を読み、また聴聞した者たちは、これを人生の教訓とし、時には人に酒を勧めて仏法を説き、時には自ら酒を飲んで身の破滅を防ぎ、ただひたすら悟りへの道突き進むのである。

## 注

- (1) 成立は不明であるが、永禄一一年嚴島神社観世大夫法楽能で演じられているという(『日本古典文学大辞典』一卷31頁)。
- (2) 『大蔵虎明本 狂言集の研究 本文篇 中』(表現社、昭和四八年) 346頁。『悪坊』の内容も本書所収の本文を利用した。
- (3) 田口和夫『悪太郎』の形成と展開』『狂言論考』三弥井書店、昭和五二年。初出は『国文学、言語と文芸』七二巻、昭和四五年九月。
- (4) 日本古典文学大系『狂言集(下)』岩波書店、昭和三六年、

324頁。

- (5) 『上田秋成全集』第8巻、中央公論社、平成五年。
- (6) 美山靖氏校注、新潮日本古典集成『春雨物語 書初機嫌海』(新潮社、昭和五五年) 83頁。
- (7) 「悪に強いは善にも強い」という慣用句は、幸若舞曲『敦盛』や『景清』(大江嘉永本) などにも見える。また、後掲の秋成の言辭は、『西遊記原序』(宝暦八年刊『通俗西遊記』)の「此心放ツトキハ即チ妄心ト為ル。妄心一起スルトキハ則チ能ク魔ト作ス。此心取ムルトキハ則チ真心ト為ル」を典拠とすると言われている。
- (8) 該箇所は、大正新脩大蔵經四六卷諸宗部三『摩訶止観』114頁、あるいは岩波文庫『摩訶止観』下巻226頁である。
- (9) 「魔仏一如観」については、小椋嶺一氏「秋成『魔仏一如観』の系譜」(『大谷女子大学国文』一〇号、昭和五五年)に詳しい。
- (10) 『捨石丸』後半部で、非力な小伝次が修行して変幻自在の武芸を体得し、捨石丸の力を凌駕したことが描かれている点は、物語の主題・構想の上でとても重要である。
- (11) 新日本古典文学大系『狂言記』岩波書店、平成八年。
- (12) 『西鶴諸国ばなし』は貞享二年刊。該当話は『定本西鶴全集』第3巻(中央公論社、昭和三〇年) 36・75頁に見える。
- (13) 『十返舎一九全集』(日本図書センター、昭和五四年) 247頁。
- (14) 『日本庶民生活史料集成』第16巻(三一書房、昭和四五年) 293頁。

(15)『百人坊主』については『現代上方落語便利事典』（雪溪書房、昭和六二年）を参照した。

(16)『大山まいり』については、関山和夫『落語風俗帳』（白水社、昭和六〇年）や、興津要『古典落語（下）』（講談社文庫、講談社、昭和四七年）などを参照した。

### 付記

日本昔話通観28巻『日本昔話タイプインデックス』（同朋舎出版、昭和六三年）の笑い話 894番に「おれは誰か」という話型名の昔話が登録されており、同書研究篇2『日本昔話と古典』（同朋舎、平成一〇年）には、当該昔話と主要モチーフが対応する古典として狂言『悪太郎』が指摘されている。両書に拠れば、同話は北は青森から南は熊本まで、日本全国で九話の類話があり、アジア・ヨーロッパにも類話が多く分布するという。詳細な比較検討は避けるが、多様な展開を示すこの昔話の主眼は、剃られた自分の頭を撫でながら主人公がつぶやく「おれはいつたい誰だろう」という言葉の不条理性であり、さらに言えば「髪の毛」を媒介としてのアイデンティティの問題である。展開・主題から考えて、当該話は、本稿で言うところの「酔人出家・破戒譚」とは別系統の笑話とすべきであろう。

### 追記

本稿は、仏教文学会の一九九三年一月例会、および伝承文学研究会二〇〇〇年一月例会での研究発表を踏まえている。席上もしく

はその後、貴重な御意見や資料を御教示くださった多くの先生方に厚く御礼申し上げます。

（みうら・しゅんすけ 本学非常勤講師）